WA 7
(1)
263

いつまでかはさぶらひ世間文家あまたこれかの
ひとりかたにてあるべきなりとはあ
るべからずとれども時の紀伝の学のかりの
めしり日本にて異なる物語つくりあつまるとく
めさ海しき物ふをかりめを物語あり物語
をれしらずしらの文教あちいまりてやを
うをかきゆふのもつくりあつまをくを人
のふとのをうこをうをとのふ法皇りに
やありをんいてあるべくかりり物んかをけ
りををうちををいをあるすのをれかり

みくしげどのとかくまをかわりゐ
ぬるあるかのいたはしもてはやすけかうそ
孫と語りしうへの人うのあそれてりかうけわうた
れんとうへれ女房ねとをひたのひあてう
なくてそそそそそうかりまわとうとうとう
ぬくはしうすきてのちうまきかてけるあ海う
ふうつうたをねしうあうきにちんとうかう
ねしうあかさあうとうふうのいれうの井か
とをさてしねくあをあうさうはちうく
めうとうたをねへをみあてまわうひくさん

ぬうくさあをたりかあるとをの人のもあ孫の
くちうとうとう人のあれあはしるあとをぬ殺殺
うくんをねかしうのうさまひとう一
の交をみをそまうあをねはまうの交の海こ
ひうさうをりかしいそけうとうをれ魚魚
れめのとかをけうりけをうう海と光
うめをうぬくちてけをあうくさんき
ゆふれの祇つねもあをぬしいけうとて
おくくく極とのの命かいふをけうはす
をけくあのおうをれかくをあうとて安

はつかんといふ世話なし紀伊とらう物か
ど何る寅おりにはある証でそうのれかく
み母そうはようりやうのうし話つりくらは
さうそくひそうて留れらしあけのてきとめく
そのそへ話まう紀へて前しきてくいきう
まていうは肉まうりと頭ぶ小かう気らくて
はうしくうへぬれ何うさ海なく思ういそ
ここもれなくさいう話うんおと伝そうの
あうきもれとらく作まし忠き前乃まひ
えそまいらんをて人ぞう分つ又と

えそまう庭でしけしもわらんもいてうし話
めん毎うみうひ紀こし話てすらくともえ海
いうを毎てまう話となかうくう命海え海
だ教とのこもう世話いさうくうをあまれは
そうて海はうおまへ乃はかさんさい乃いてお
り話さ何う里わう北海話んするやうりて
表のひやうにむかく紀う話う乃女房めめ人
はかうり世話らく海物かうりせさ世話かり當
里こ此よう鳴られ海らんするまる根寺の此忠
亭予院乃りくを話く保せつう掟之母よ海

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

よにたくひなしと見たてまつり給ひ
名たかうおはする宮の御かたちにも猶
にほはしさはたとへんかたなくうつくしけ
なるを世の人ひかる君ときこゆふちつほならひ
給ひて御おほえもとりとりなれはかかやく
日の宮ときこゆこの君の御わらはすかたい
とかへまうくおほせと十二にて御元服し
給ふゐたちおほしいとなみてかきりある
事にことをそへさせ給ふひとゝせの春宮の御元
服南殿にてありしきしきのよそほしかり

し御ひゝきにおとさせ給はす所々の饗
なとくらつかさ穀倉院なとおほやけこと
につかうまつれるおろそかなる事もそと
とりわきおほせ事ありてきよらをつくして
つかうまつれりおはします殿のひんかしの
ひさしひんかしむきにいしたてゝくわんさ
の御座ひきいれの大臣の御座御前にありさ
るの時にて源氏まいり給ふみつらゆひ給へ
るつらつきかほのにほひさまかへ給はん事をし
けなり大蔵卿くら人つかうまつる

いときようしおろかなるしとそく縄ゆるゝ
空なるをとらへいとゆすゝ雨のゝ御しうゑとおほ
志川らふたへかき紀をむれよく稀む志か画
をせ給ふらふりし給ひく浅やをゝ雨ふ
まうそ給ひて流そそ徳ほうまく松りて
えふしたてまつり給さ御ゆみか人微行く
し給流うくてきてえ志のひめへたまて
すおわし御き歌れりをありつゝせしのあ
やしりゝ色恋しく給さうにそかう
たびえなうほとあけれはやゝきうけ

をたいおかさ逢つるとかきまうまほしけさそ
ひたまへりひ義の大臣の見人のけれは
めくきりしつき給ふ給ひしを善文より
上れ宿をさわるとおわりまつゝ御ともめのけ
ほうこの君にそまうらんの流ふなりゆり
内にを流しきたまふせ給ひられてきは
此にお乃流う給をかゝめるとそひすゝる
をとよかを世給ふねんさかわしありけつひ
又御そて給てへてお返き泥なを御いろかくてゝ
山あちの浄庭乃せ志り源氏つき給へり

国立公文書館